

令和元年度札幌市総合教育会議

- 1 日 時 令和元年9月9日（月）13時～
- 2 場 所 S T V北2条ビル6階 会議室（中央区北2条西2丁目）
- 3 出席者 札幌市長 秋元 克広  
副市長 町田 隆敏  
教育長 長谷川 雅英  
教育委員 池田 官司（教育長職務代理者）  
阿部 夕子  
佐藤 淳  
石井 知子  
道尻 豊
- 4 事務局 教育委員会 教育次長 檜田 英樹  
生涯学習部長 鈴木 和弥  
学校教育部長 相沢 克明  
総務課長 宮地 宏明  
教育政策担当課長 高橋 俊範  
庶務係長 松平 健次  
教育政策担当係長 吉田 亜希子  
教育政策担当係長 小林 明弘  
庶務係 後藤 詩緒里  
教育政策担当係 白土 瑞樹
- 5 傍聴者 10名
- 6 議 題  
札幌市の教育の振興に関する「大綱」について

○鈴木生涯学習部長 それでは皆様お揃いでございますので、ただいまから、令和元年度第一回札幌市総合教育会議を開会いたします。

進行を務めます、札幌市教育委員会生涯学習部長の鈴木でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

はじめに本日の資料でございますが、皆様のお手元に、本日の次第、座席表、育む さっぼろっ子 教育の大綱、「育む さっぼろっ子 教育の大綱」策定に当たっての思い、札幌市教育振興基本計画改定版の本書と概要版、以上合わせて6点をお配りしております。

それでは、本日は市長からのご提案に基づきまして、札幌市の教育の振興に関する「大綱」についてご協議をいただきます。

以降の進行につきましては、秋元市長にお願いしたいと存じます。どうぞよろしくお願いいたします。

○秋元市長 皆さん、こんにちは。大変お忙しいなか、総合教育会議にご出席をいただきましてありがとうございます。

今、資料の説明をいただきましたけれども、今日のご議題いただきたい事柄といたしましては、教育振興に関する「大綱」についてご議論いただきたい、このように思っているところであります。

お手元に資料2ということで、教育の「大綱」ということで教育の方針、取組の柱、これを4年前にご議論いただいて決めさせていただいたところであります。

資料3とも併せてご覧をいただきたいと思っておりますけれども、このときの大綱を4年前に決めるときにあたって、例えば「生きる力」というようなことだとか、世界の舞台で活躍する「さっぼろっ子」ってどういうことだということの議論もありました。そこはもう少し丁寧に説明をしたほうがいいのではないかというご意見をいただいまして、この資料3「大綱策定に当たっての思い」というものを一緒に公表させていただきました。

現在の大綱につきましては、その未来を担う子どもたちを健やかに育みたいということとありますけれども、このなかで生きる力ということと、世界の舞台で活躍するということがございました。

この資料3をご覧ください。なかで、生きる力という言葉のなかには様々な複雑化している社会のなかで、自分の場所、子どもたちが自らこういう場所を作っていける力とか、物事を解決していける力を身につけてほしいという思いを込めたところでもあります。

また、世界の舞台で活躍するという言葉について必ずしも海外で活躍するということをここで申し上げているのではなくて、グローバル化、国際化ということが進展をしていくなかで、広く世界というものを意識してもいかざる得ないわけでありまして、そういった意識を向けながら、いろいろな場面で多様な視点で、共生社会というようなこともあるでしょうし、それでお互いを理解し合うということもあるだろうと思いますが、そういう視点で物事を考えられる子どもになってほしいという意味で少子高齢化、さらに複雑化をしていく時代のなかでそれぞれ子どもたちが自らの力でいろんな解決をしていける、自らの場を作っていける力、そして世界的なグローバルな視点で物事を考えていけるような、そしていろいろな多様性を認め合えるようなそういう子供になってほしいということで、この教育の方針を作らせていただいたわけでもあります。

そういったなかで、この4年経ってその状況がどう変わったのかと申しあげますと、少子高齢化、グローバル化ということについてはさらに進んできているわけでありまして、その4年前に想定をした事柄というのは基本的にはそれはより複雑化をしているという状況にはなっておりますけれども、こういう変化が激しい時代であるからこそ、よりこの教育方針で言っている事柄ということは重要になってくるのではないかと考えているところでもあります。

そういう意味では2022年、3年後に札幌市になって市政施行で100年という節目を迎えます。そう意味では私たちは今生きている時代だけではなくて、これからの50年後、100年後の社会を見据えながら、今様々な施策をしていく必要があるだろうと考えているところでありまして、未来を担っていく「子どもたちが健やかに育つ街」さっぽろを目指したい、ということについて、これは選挙の公約のなか、そして就任後の市政方針のなかでも、これを謳わせていただいていたところでもあります。

そして現在の大綱を策定した際に、札幌市が目指すまちづくりの方向性というものと、教育振興基本計画のなかにあります、「札幌市の教育が目指す人間像『自立した札幌人』」ということ私が目指すまちづくりの方向性とこの教育振興基本計画でいう「自立した札幌人」ということが合致をしているということがございましたので、具体的な教育政策

というのは、取組の柱というものだけをここに掲げて、具体的な教育政策についてはこの教育振興基本計画のほうに委ねるということを見せていただいたところであります。

今年2月に新しい教育振興基本計画というものが改定をされましたが、この中でも引き続き、「自立した札幌人」ということを掲げて、教育施策を推進することとしているということになりますので、先程申し上げました、この4月の選挙をあけて2期目に入ったときのまちづくりの方向性と、教育の振興基本計画という方向性が合致をしているということ判断させていただいて、結論といたしましては、この社会情勢というものの大きな変化、この4年前と大きな変化がないということ、むしろグローバル化とかそういうことについては強まっているということも含めて、現行の教育大綱を継続していきたいと、このように考えているところであります。

従いまして、この教育大綱については基本的な改定ということではなくて、これを継続してまちづくり、あるいは教育振興基本計画に基づいての政策を進めていきたいとこのように思っているところであります。

その上で具体的な政策につきましては、この4年間に取り組む計画というものを今、策定しております。まちづくり戦略ビジョン・アクションプランという名称で、この4年間に取り組む様々な事業を今、中期計画として検討しております。

そのなかにこの教育振興基本計画のなかで謳われているような事業ですとかを、具体的な事業をその中期計画の中に入れていきたいと、このように考えているところであります。

そこで、本日ご議論いただきたいのは、この「教育大綱の継続」について、継続すべきか否か、改定すべきかということについてご意見を頂戴していきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、早速各委員の皆様からご意見を伺ってまいりたいと思っておりますが、今のまでのところで何かご質問等ございますでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは各委員からご意見頂戴できればと思います。

まずは池田官司委員からお願いできますでしょうか。

○池田委員 はい。池田でございます。この大綱の前文では、『子どもたちが健やかに育つ街』さっぽろ』を指すというふうに謳われておりまして、これは、市長の今ご説

明ありました市政方針とも合致しておりますし、変化の激しい世の中で生きていく子どもさんたちへの教育の在り方を考えていく上で、大変重要なことと存じます。

特に子どもの心を育てるという点では、心ですとか、発達の悩みに対して適切に支援していくことが重要と考えます。そのためにさらに関係部局や医療機関などとの連携を図っていくと。特にこころのコンシェルジュ事業などをさらに周知し、活用していくことが大事だと思います。

また、札幌市でもいわゆるLGBTに関する施策というのが進められていますけども、こういった子どもさんの性自認に関する悩みにもきめ細かな対応をしていくことが重要だと思います。子どもさんたちが安心して学ぶことができる環境づくりというのを進めてまいりたいというふうに思います。

さらに、子どもさんの心のみならず、札幌市の教育を今支えている教職員の皆様のメンタルヘルスも非常に重要な問題だと思います。教職員の皆様が意欲的に教育活動に取り組むことのできる環境を整えていくということも非常に大切と考えています。

後期の教育アクションプランでは、「教職員が質の高い教育活動を実現できる環境づくり」を施策として新たに位置付けて、校務の効率化、外部人材の活用など、学校における働き方改革に係る取組を進めているところでございます。

これからも、大綱の方針にもあるように、子どもさんたちの「生きる力」を育んで、大きく伸ばすことのできる教育環境づくりに努めていくことが大事だと思います。この大綱に関しましてはこのあとも特に改正等なく、このまま堅持していただければと考えております。以上です。

○秋元市長 はい、ありがとうございます。今、身体だけではなくて心の子どもたちへのサポートを含めてという形でございました。そういう意味では子どもたちが安心して生活し、学習することができる環境を整えるという取組の柱のなかでそのことも実現をしていければなというところでございます。

それでは、佐藤委員。

○佐藤委員 はい、ただいま市長から教育の大綱について継続してよいかというお尋ねをいただきましたので、お答えとしてはぜひ継続すべきと私は思っております。

特に取組の柱の3点目にあります、「創造的に考えることができる子どもたちを育む」という部分について、その重要性和私なりの考えを述べていきたいと思っております。

現在、教育委員会としましては、学校教育の中で、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら問題を解決するという、いわゆる「学ぶ力」の育成に取り組んでいるところでございます。

このような一連の問題解決の流れの中で、もっとも重要でかつ一番育成するのが難しいのは、実はスタート時点の「自ら課題を見つけること」、つまり解決すべき問題を自ら発見できるスキルだろうと私は思っております。このスキルの育成と、取組の柱に謳われている「創造的に考えること」とは大変密接な関係にあって、「検証可能な問いを持つ」という一点で括ることができるだろうと考えております。

そうした問題発見のスキルの1つに、「思いついた問いを具体化してみること」ということが挙げられると思います。例えば、「教育とは何か」という抽象的な問いというのは確かに問題の形式にはなっておりますけれども、そもそも1つの答えが見当たらない問いでございますので、それだけでは検証して解決を導ける問題として成立しておりません。哲学ではそういった問題を擬似問題、*pseudo problem*というふうに呼んでおりまして、いわば問いが1つに定まらない問題のような形であって問題ではないというふうに呼んでいるわけです。どうしたら擬似問題が真の問題になるかという、抽象度の高い問いを具体化してみるということになります。

例えば、「教育とは何か」という領域を絞って「学校教育とは何か」としてみると、さらに学校種を絞って「中学校の教育はどうあるべきか」としてみると、次に教科を絞って「中学校理科の教育はどうあるべきか」、さらに単元まで絞って「中学生に生物の進化をどう教えるべきか」というふうにどんどん具体化してみますと、ようやく生物の進化をどう教えるかという辺りで、この先行事例を参照できることになるわけです。つまりこの時点で検証可能な問題となっていると考えられるわけです。

始めの「教育とは何か」という壮大な問いから随分矮小化されたという印象を持たれるかもしれませんが、やはり個々の人間がそれぞれの関心に基づいてそれぞれの問題の絞り方という形で答えを出して行って、それを集大成することによって、その当初の大きな問いの解決に迫っていくことになるのだろうというふうに考えております。子どもたちにはぜひ、この「自ら持った問いの具体化」を促してみたらよいのではないかと考えております。

それからスキルの2つめに近年注目されるようになりました「アブダクション」を挙げたいと思います。アブダクション、仮説形成的推論と訳されることが多いようですが、要するに、命題の逆を問い、すなわち仮説として作って、その真偽を検証してみる推論のことです。

学校の教科書に書かれておりますことは、突き詰めればすべて「pならばq」という命題、法則、理論といったような形になります。それを子どもたちが鵜呑みにしてしまうのではなくて、「pならばq」というのであれば「qならばpは正しいだろうか」という問いを持ってみると。それを自ら検証してみるとアブダクションということになります。即座にその逆も真だと考えてしまうことは論理的な誤りになるわけですが、こういうふうに関心として検証してみる分には全く問題ないと考えています。

例えば、地理などの教科書に、地球上では「高緯度であれば降水量は少ない」と書いてありましたら、「降水量が少ない土地はすべて高緯度にあるのだろうか」という問いを作って理科年表で調べてみるとします。そうすると砂漠のように低緯度でも降水量が少ないという例外が見つかることとなります。なぜそうした例外が存在するかを考えていけば、地球上では緯度以外に気流も降水量に影響しているということがわかって、子どもたちの認識の発展に繋がっていくということになるわけです。こういう逆思考のスキルを身に付けさせることは、子どもたち自らの問題発見を大いに促すというふう考えております。

以上のように、私は、大綱にある「創造的に考えること」と、学ぶ力に挙げております「自ら課題を見つけて検証すること」はほぼ同じ意味だと考えています。そして、「創造性を育むこと」それは1つの擬似問題ともいえますけれども、この解決には只今挙げた2つのほか、様々な具体的な方略があり得ると思っております。札幌市の先生方には、「創造性の育成」を大層なこととは捉えずに、日々の授業の中で伝えていくことができる細かなスキルのことなのだとお考えいただければと思っております。以上でございます。

○秋元市長 はい、ありがとうございます。我々の、この創造性とか創造力というんですか、創造性を育むとかいうのを非常にイメージとしてはよくわかるのですが、なかなか具体的なイメージとして、あるいは、創造性を育むということなんですね、プロセ

スを明確にイメージするという事はなかなか難しいなど、実は私なんかは思っていたんですけども、今、佐藤委員のお話を聞いて少しなるほどなと思うところがありまして。

問いの具体化の具現化だとか、あるいは逆説でものを考えたときの考え方というのは、そこから派生することを考えていく、ある意味のスキルということなのかもしれませんが、そういうことを身につける、あるいは考えるプロセスを起こすということで、ある事象からいろいろなことを考えていく力というのは作るというか、そういうことがあるのかなと思ったところです。

また、そういう具体的なスキルですとか、おそらく教育のなかでもいろいろなプログラムのなかであるのかもしれませんが、できるだけ具体化、具現化をして進めていくということが重要かなと、改めて今感じさせていただきました。ありがとうございます。

それでは続いて道尻委員にお願いできますでしょうか。

○道尻委員 はい、道尻です。まず、現在のこの大綱につきましては、私も全体として継続し、一層推進を図っていくことが相当だと思っております。大綱の取組の柱の1つ目に、「子どもたちが安心して生活し学習することのできる環境を整えます。」とあります。これは、子ども一人一人が健やかに育ち、学ぶ権利を保障するということにつながる考え方でありまして、「札幌市子どもの最善の利益を実現するための権利条例」の理念にも沿っております。

私からはこの取組の柱の1つめに関連しまして、3点ほど意見を述べさせていただきますと思います。

まず1つめは、子どもが笑顔で、生き生きと学ぶことのできる環境を実現するためには、教育内容の充実だけではなく、安全な学校施設の整備ですとか、家庭への経済的支援、不安や悩みを抱える子どもや保護者に寄り添う取組など、様々な側面から、子どもや家庭を支援していくことが必要だということです。

後期の札幌市教育アクションプランにおいても、「安心して学ぶための支援」を重要項目の1つとしておりまして、子どもやその家庭を支えるための施策を展開しているところであり、こうした取組を一層推進し、安心して学ぶことのできる環境を整えることで、子どもは自らの可能性を感じ、自分の夢や目標に向かって努力することができるようになると思います。



次に2つめですが、子どもたちの内面において、自分の権利を意識すること、それと同時に他者の権利も尊重する態度を育むことも重要だと思います。やはり、後期の札幌市教育アクションプランにおいても、命を大切にすゝ指導の充実を重要項目の1つとしております。例えば、さっぽろピリカコタンや、来年4月に白老町にオープンするウポポイなどの施設を利用し、民族共生の観点からアイヌ文化に触れることをきっかけに様々な権利や文化を尊重する態度を育むというような教育の考え方もあると思います。

3つめとして、近年、子供たちの人権や安全の面で気がかりなこととして、インターネットやSNSを使ったトラブルや犯罪に子どもたちが巻き込まれる、そういった事例が後を絶たないということです。この問題には家庭生活や家庭教育の在り方ということもかかわっておりますので、学校だけの問題ではないという前提ではあります。ただし、そういったトラブルを避けるための安全教育というのは各家庭のみで行うということにはどうしても限界があると思います。専門家による講演ですとか、常に最新の手口やトラブルを紹介していくなど、学校だからこそできる役割があると考えております。以上です。

○秋元市長 はい、ありがとうございます。今3点ほどお話をいただきまして、様々な安全な教育環境だとか、経済的な支援を含めた様々な家庭、子どもたちの相談だったり、支援だったりというようなお話がございましたし、他者の権利の尊重ということでこれはやはり、冒頭お話申し上げました国際化だとか、いろいろな形があるときに、他者のいろいろ違いとか、生活なり、文化なりの違いというようなことが新たな違い、こういったものを尊重しながら自らを自分の考え方を固めていくといたしますか、そういう共生社会ということをより子どもたちに知ってもらふ必要があるのだらうと思います。

民族共生というようなことの、新しい施設もできますので、そういった施設を活用しながらさらに進められればなと思いますし、3つめの情報の取捨選択といたしますか、非常に我々子どもの時代からしますと、圧倒的な情報量、このインターネットだったりします。

またそれが、何が正しくて、正しくないのかという判断をしていく力とか安全教育ももちろんそうですし、情報を正しく使う、そこに判断していくという力をより今のこれからの子どもたちにさらに求められていくのかなと思っています。

最近非常に危惧しているのが、ある意味ではSNSとかで、匿名性で何を言ってもいいのだという情報が氾濫をしてしまっている。少し過激な他者の攻撃みたいなものも非常にでてきたりしてしまっていて、そういったなかでいかに子どもたちを守っていくか、いじめにもつながっていく部分も非常にあると思っていますし、LINEで反応がないと不安になるというような子どもも非常に多いみたいですので、情報通信が発達していくなかで子どもたちの安全安心というものをどうやって守っていけばいいのかというのが大きな課題なんじゃないかなと、そのように思っているところでございます。

石井委員、お願いします。

○石井委員 教育委員の石井でございます。現行の大綱に対して、まず肯定的であるとした上で、意見を述べさせていただきたいと思っております。大綱の教育の方針では、「生きる力は子どもたちの中にある」とし、2つめの柱には子どもたちには無限の可能性を持っているとしています。

こうした肯定的な子ども感を持つことは私も教育や子育てにおいて、とても重要であると考えております。子どもたちが多様性を認め合って自ら創造的に考え、主体的に行動できるような自己肯定感や、自己実現欲求を持てるような環境というのは、我々大人がまず作っていくべきものだと私は考えております。

そのためには、大人自身がまず自己肯定感や自己実現欲求を持って、主体的に行動している様子を子どもたちに示す必要があるとも考えております。

昨年の総合教育会議の際に、夢や目標を持つことの大切さについて、私が申し上げたことに関係しておりますが、バブル崩壊後に育った私たち世代に対して、大人たちは子どもたちを心配するあまり、夢や希望や目標といったものよりも、安定していることが重要といった風潮があったように思えます。

そのなかでは、子どもの考えでしたり、意思というのがないがしろになり、進路を狭めがちになってしまったこともあったのではないかと考えています。子どもの可能性を親や周りの大人が狭めてしまうということは、ただ、大人たちが悪いというのではなく、大人自身、社会不安のなかで、少しでも子どもたちに安心して暮らしてほしいという子どもの幸せを願う気持ちからそうになってしまうのだと思います。

また、生活が困窮していたり、仕事や育児の忙しさやストレスでそもそも教育に目をやる余裕がないという人も非常に多いと思っております。

少し話はずれてしまうんですけども、心理学者のマズローが、「人間は自己実現に向かって絶えず成長する生き物である、人間は段階を踏んだ欲求があり、1つ下の欲求が満たされると次の欲求を満たそうとする」と言っています。まずは生理的な欲求、その次に安全、所属と愛、承認、そして一番最後に自己実現の欲求です。大人たち自身、社会不安の気持ちが強いと自己実現欲求という高い次元の欲求に基づく行動に移ることは非常に難しく、それをまた子どもたちに求めることも難しいと私は思っております。

秋元市長の「教育の大綱策定に当たっての思い」で言及しているように、まちづくりの原点は、人づくりにあると私も思っております。子どもたちの教育を担う私たち大人たちの人づくりには、生活の基盤が安定しているということが前提になると思いますので、教育の枠組みから少し離れてしまうとは思うんですけども、教育委員会や札幌市の各関係機関が連携してまちづくり、人づくり、教育に取り組んでいければと私は思っております。

そういったまちづくり、人づくりが整った上でこそ、学校、地域、家庭が連携して子どもは素晴らしい可能性を持っているとした、共通した子ども感を持って、子どもの可能性を伸ばしていこうという思いを持ったり、行動を積極的にできるのではないかなど私は考えております。以上です。

○秋元市長 はい、ありがとうございます。子どもたちの自己肯定感とか、自己実現とか達成感みたいなもの、やっぱり非常に社会が不安定な状態、あるいは経済的な不安というようなものが広がれば広がるほど、若い人たちに自己実現していくあるいは達成をしていこうということ、肯定も含めてですけど、なかなかない。

社会が悪いのだ、みたいな感じになりがちですから、基本的には生活、家庭環境含めて、今、子どもの貧困というよりは家庭の貧困問題だったり、経済的な安定というものがあっていろいろな夢とか希望を持っていくということになっていくんだと思いますので、今、お話しのように、教育環境を整えていくということ、これはもとよりなんですけども、基本的には生活していく市民の生活がより安定をしていく、豊かになっていくと、物理的な豊かさだけじゃなくて、そういう社会があって初めて子どもたちが夢とか希望を持てるということになっていくんだらうと思いますので、そういう意味でまちづくりの方向性と教育の具体的な方針、政策というものは、両方タイアップをさせてい

くというんですか、繋げていかなきゃいけないんだろうという思いでいるところであります。

具体的な政策等については、先程も申しましたように、まちづくりの政策とはかなりリンクをしていかなきゃいけないと、このように思っております。ありがとうございます。

阿部委員、お願いします。

○阿部委員 阿部でございます。私の方といたしましても、秋元市長からお話がありましたように、教育の大綱につきましては、賛成という立場でお話をさせていただきたいと思っております。

特に、取組の柱の2番目と3番目につきまして、「学びや成長の機会を充実させ、子どもたちの可能性を広げます。」という点と、「ふるさと札幌への思いを持ちながら、国際的な視野で創造的に考える、考えることができる子どもを育みます。」というこの2点につきましては、国際性やグローバル化に対応したキャリア教育の必要性という観点からお話をさせていただきたいと存じます。

まず、後期の教育アクションプランにおきましては、「国際性を育む学習活動の推進」ということを重要項目の1つとして、挙げているというところから、英語教育の更なる充実などを取り組んでいるところでもありますし、子どもたちに国際的な視野を育むことという観点からおきましても、大綱の方向性としては引き続き重要性があると感じております。

私自身は、さっぽろ未来創生プラン推進有識者委員の方もさせていただいておりました、そのなかで聞いたこととなりますし、私の周りにも起きていることの1つにいたしましては、ここ最近若者の皆さんたちが札幌ではなく、首都圏などの道外企業への就職先を求める傾向が見られるということを感じております。これにつきましては、自らの可能性を信じて、様々な地域で活躍したいという意欲についてはとても素晴らしいこととは思っておりますけれども、実は札幌にも先進的でグローバル化に対応した企業はたくさんあるということ、子どもたちにも知っていただく機会を創造していくことの必要性を感じております。

7月の末から8月におきまして、私たち教育委員は全員で教科書の採択をさせていただきました。全ての科目に課題探究というところが答申で謳われております。そういっ

た視野におきまして、教科書を採択させていただきましたので、今現在もそうだと思いますし、今後も教科のなかでいろいろな職業に触れたりとか、いろいろな地域の方に触れていただく、教科の中で触れていただく機会がますます増えていくこととっておりますが、やはり、実際に札幌で活躍していてそういう行動をしている札幌の人と直接的に会う機会を作っていただくということが、リンクしていくのではないかなと私自身は感じております。私の周りにもグローバルに対応している企業さんはたくさんいらっしゃいますし、個人でもそのような活動している方はたくさんいらっしゃいます。

子どもたちは自分の親、それから周りの先生たち、職業については自分の親がどんな職業をしていて、自分の周りの人はどんな仕事をしているか、ということを経験的に感じたり見たりすることはできますが、それ以外の職業に触れる機会というのが今非常に少ないと私は感じております。

私は一人の経営者として札幌の子どもたちがぜひ札幌の企業で勤務していただく、この道筋というのが今非常に少ないということもあり、札幌の中小企業の私も含めた企業の社長さんの皆さんと会話する機会が多々ありますが、必ず出てくるのは人材不足、こういう人に来てもらいたいけどなかなかいないんだよねということがもう筆頭としてあがってきます。

そういったことにつきましても、企業と札幌の子どもたちがつながる機会というのが今全然ないわけではないと思いますが、そういった機会を作ることによって子どもたちが国際性やグローバル化に対応したキャリア教育の一貫につながっていくものと私自身は感じます。その企業がどのように国際性につながっていて、どのようにグローバル化しているかということをやはり人と人とのつながりを作ることによって、札幌にはこんな素晴らしい企業があるんだということが教科で学んでいることと社会とのつながりを作るそういった一つの力にもなっていくんじゃないかなと思います。

秋元市長が掲げられている、石井委員からもお話がありましたように、まちづくりの原点は人づくりです、ということに私も非常に共感いたしております。そういった意味でも人と人をつなぐ機会というのをもっともっと作り出すことによってこの大綱の意味がもっともっと発展して推進されていくことと私自身は感じておりますので、そのような観点からも引き続きの教育の大綱がますます推進されることに期待を感じて、このようにお話をさせていただきたいと存じます。以上です。

○秋元市長 ありがとうございます。今、札幌のまちづくりのなかで、いろいろな政策を掲げていくなかで、1つ大きな解決をしていかなければいけない課題の1つとして、やはりこの若年層、若い人たちだけでみると、道外への転出の方が超過状況になっています。

そう意味では、地元、北海道なり、札幌で暮らしたいと思っている人たちは非常に多いんですけども、現実的に最終的に就職という状況になってくると、道外へ転出をしている。北海道全体でいくと、札幌に若い人たち、学校とかたくさんありますから、札幌に道内の他市町村から入ってきて、学校を卒業すると道外へ出て行ってしまいます。これ何とか歯止めをかけていきたい。

北海道全体の生産年齢人口が落ちていくということの歯止めをかけるなかで、札幌がダム機能というんでしょうか、人材の受け止められる環境づくりをしていく、それを一番に考えたい。希望する人が、地元に残りたいという人たちが札幌、北海道に残れるよう、家庭を持って子育てをすること含めてそこで、生活ができるという環境を作っていくということを何とかしていきたいというのが一番思いが強いです。

そういう意味では、経済的な地域経済力を上げていくというようなこともあるんですけども、子どもたちにもいろいろな仕事、今、いろいろな企業の方にお伺いすると、必ず人材の確保というのが非常に一番の課題となっている。

一方で、就職する側の若い人たちからすると地元に残りたいんだけど地元に残れない。このミスマッチみたいなのを埋めていかなければならないんだらうということなんですけれども、やっぱり、十分知らされていないとか、こういう働き場、企業があるということを知らない。知らせていないということもあるのかもしれませんが、やっぱり、大手企業の情報はたくさんあるんだけど、地元の企業の情報というのは少ない。これは発信する側に問題があるのかもしれませんが、そんな状況がありますので、いろいろな仕事の選択の可能性、キャリア教育というようなことだとか、この辺はやはり地元の企業の皆さんとも一緒になって、この課題解決をしていければなと思います。そんなふうに思っています。

教育長、お願いします。

○教育長 ほかの委員からも既にお話いただいているところではございますけれども、私といたしましても、現在の育む さっぽろっ子 教育の大綱、これにつきましてはぜひ継続ということでお考えいただければと思っております。

先程市長からもお話ございましたけれども、市長のまちづくりに対する思いということで、「すべての子どもたちが健やかに育ち、学ぶことができる環境づくりを推進していくこと」、そして、「一人一人を大切に取る取組を進め、子どもが安心して暮らせる環境を整える」、この思いといたしますのは、教育委員、教育委員会の思いと重なるものでございます。

ちょうど、4年前でございますけれども、平成27年、地方教育行法の改正に伴いまして、教育委員会制度も変わって、この大綱ということの、新たな大綱の策定に向けた総合教育会議の場に私はちょうど生涯学習部長という立場でその場に就かせていただいております。当然、池田委員、阿部委員もいらっしゃったわけですが、市長と教育委員との間の熱心な議論をしましてまいりました。

あれから4年経過しておりますけれども、教育を取り巻く環境というのはますます厳しくなっているというふうにも実感をしているところでございます。

先程、池田委員からもございましたように、教職員の働き方改革、それから、いじめとか虐待、昨年発生いたしました北海道胆振東部地震に台風、今、関東の方で台風で大変ですが、そういった災害対応等々にしっかりと対応していかなければいけないものがたくさんございます。

教育への不易と流行という言葉をよく使いますが、この不易、時を超えて変わらない大事なものの、そして流行、時の変化、ともに変えていく必要があるもの、この2つでございますけれども、こういった子どもたちの取り巻く環境、社会が一層複雑化するなかで、先程ございました、大綱策定に当たっての思い、ここに示されております、自分の場所を作っていく力、そして物事を解決していく力、こうしたことが生きる力、子どもたちを育むということで、教育における不易ではないかということで、変わらないものとして、私も同様に考えていくところでございます。

先日、苗穂小学校で100周年の開校記念式典がございました。札幌の市政施行より若干早く100年を迎えたわけでございますけれども、そこで、100年のとき、人のつながり、これをすごく感じられる式典でございまして、なかでも教育の不易と、変わらない

部分というのをかなり強調されておりまして、大変糧となるところの多い式典ではございました。

一方、国際化とか情報化、これについては、今のを外していくと流行、時の変化とともに変えていかなければいけないというところにもなるのかなと思っておりますけども、この「世界の舞台で活躍する」、この言葉に込められました広く世界に意識を向けながら、多様な視点で物事を考えられるようになってほしいという思い、この願いにつきましては、SDGsの未来都市、これを標榜します、これまで以上にグローバルな視点から未来を見据えたまちづくり、これを進めていかなければならないという札幌としては大変重要なところではないかなと考えてございます。

これまでも札幌の子どもたちの生きる力、これを育成するために、当然、教育の大綱、教育振興基本計画、これに基づきまして、様々な政策を展開してきたところでございます。効果がでてきている部分もあるんですけども、なかなか一朝一夕にやりにくいものもございます。

こういった変化する社会、経済情勢のなかで、様々な教育課題、こういったものを踏まえつつ、一貫した方針として、安定的、継続的に行っていく必要があることもあるのではないかと考えております。

そうした観点から、ちょっと長くなりましたけれども、これまでの議論で確認されておりますとおり、教育振興基本計画と同じ方向性を持つ大綱、これが継続されることで、先程もお話でございました、後期での教育アクションプラン、これを力強く推進していくことができるのではないかと考えております。

市長部局との連携はもちろんでございますけれども、家庭、地域、企業との協力をいただきながら、社会全体で子どもたちの成長を支えていくということ、そして、札幌のまちが子どもたちの笑顔であふれるようにこれからも頑張っていきたいと思っております。私からは以上でございます。

○秋元市長 ありがとうございます。まちづくりの方向性と具体的な教育振興の計画、政策のなかで、やはりこの方向性がやっぱり一致していかなければいけないと思っておりますが、基本的にこの大綱と教育振興基本計画の考え方というものは合致しているので、それをさらに進めていってほしいなと思っております。



また、いろいろな課題も、複雑化してきている教員の問題もありますし、子どもたちを取り巻く社会情勢、家庭環境も含めてですけど、情勢変化もありますから、その時代時代に合わせて対応していかなければならないもの、そういったものがたくさんあると思いますので、それぞれの教育現場のなかでも教員だけではなく、スクールソーシャルワーカーですとか、心のケア、こういった人たちも含めていろいろな体制でやっぱり総合力を高めていくということが必要なのかなと思っています。非常に専門化してきながら、またそれをうまく総合化していくという必要がより出てきていると思っていますので、引き続きよろしくお願ひしたいと思っています。

そういう意味では、各委員から教育大綱については概ね継続の方向性でよろしいのではないかというお話をいただいたところでございますけれども、方向性として、この大綱を継続して取り組むということできたいと、このように思っているところであります。

また、先程限られた時間でございますけれども、少し例えば付け加え、あるいはほかの委員の話を聞いた上で、この辺を少し追加したい、あるいはこれというお話があればいただければなと思いますけど。よろしいですか。

それでは、この教育大綱の継続について、進めさせていただきたいと思っておりますけれども、それでは町田副市長の方からも。

○町田副市長 今、教育委員の皆様から教育大綱を継続して取り組んでいこうというなかでいろいろなご意見承りまして本当になるほどと思うところでございます。

私の方から一言だけでございますが、「国際的な視野で創造的に考えることができる子どもたちを育みます。」という柱について一言だけお話を申し上げたいと思います。

今、札幌市はオリンピック・パラリンピックの招致をこれから進めていこうというなかで、教育委員会の方ではすでにいろいろな形でオリンピック・パラリンピックの教育を各学校で進めていただいているところでございます。オリンピック・パラリンピック、スポーツについて、あるいは健康について子どもたちが考える、それから共生の在り方について考える、そして大きな意味で平和という意味について考えるという形で、いろいろな角度からオリンピック・パラリンピックの教育を進めていただいているところでございますが、札幌市の教育委員会、開成中等教育学校の教育プログラムを考えるとときに、インターナショナルバカロレア、IBの考え方を教育プログラムの根本と据えたわ

けでございますが、このインターナショナルバカロレアの基本理念とこのオリンピック・パラリンピック教育というか、その基本理念というのは本当に大変共通しているところがある。

さらに、長谷川教育長からもお話ございましたが、SDGs、Sustainable Development Goalsですか、今、国連が推奨しているSDGsとインターナショナルバカロレア、IBの考え方も非常に共通するものがあると思います。

1つの願いとしては、この国際的な視野で創造的に考えることができるという観点でそのオリンピック・パラリンピック教育、そしてインターナショナルバカロレアの考え方、それからSDGsの考え方というのは1つ大きく整理をして子どもたちに示していくと、さらに子どもたちがその国際的な視野で創造的に考えるということがどういうことなのかというのが、よくわかるのではないかなと思っているところでございます。よろしく願いいたします。

○秋元市長 ありがとうございます。

今日は、それぞれのお立場から、ご意見をいただきまして、今日ご議論いただいた教育大綱については継続して、この考え方のなかで取り組み、札幌市の教育振興基本計画も後期版といいますか、できておりますので、そのなかで具体的なものの実現をしていきたいと思っておりますし、先程冒頭も申し上げましたように、この4年間に取り組む中期計画、これ市政全体の中期計画のなかにも教育の問題だったり、今日お話をいただいた子どもたちあるいはその家庭に対する経済的、あるいはそのいろいろな心のケアを含めた様々な支援が生活感を高めていくといいますか、そういったようなことのなかで、住みよいまちづくりを作っていくということのなかで、子どもたちをしっかりと社会のなかで育ていく環境づくり、これをまちづくりと連動させながら、進めていきたいと思っておりますので、引き続き、委員の皆様方にもお力添えをいただければと思っております。

また、最後に町田副市長の方から、オリンピック・パラリンピックの話がありました。やや申しますと、いろいろなオリンピック・パラリンピックの招致に関しまして、財政的ないろいろな不安とか、あるいは新しい施設ができるできないみたいな、ハード的な議論にどうしてもなりますけども、基本的にやっぱりオリンピック・パラリンピックが

持っている国際的な事柄に対応した、ともに共生社会といいますか、お互いの違いを持ちながら、認め合いながら、その中で生活をしていくという生き方そのものにも変わっていきますし、ちょうど2030年というのはSDGs国連の持続可能な開発目標ということのなかともリンクをしています。そういう意味ではこれから少子高齢化という時代が、人口減少という時代のなかで、どのように持続可能な社会を作っていくか、そういった時代を乗り越えていく子どもたちの成長をどう育んでいくのかということがこの10年くらいの間にいろいろな目標が、環境の問題であったり、あるいは貧困の問題だったり、様々な課題解決ということが、世界全体の幸せ、幸福感を高めていくということにつながっていくんだらうと思いますので、そういう意味では、子どもたちの教育というものをそういうものとうまくこれからの社会情勢というものと連動させていくということがより重要になってくるのかなと思っておりますので、引き続き皆様方のご協力をいただきながら、議論を活発にしていけたらと、このように思っております。よろしくお願ひ申し上げます。

それではあの、時間の関係もございますが、本日の議題は以上ということでございます。事務局の方から何かありましたらお願ひします。

○鈴木生涯学習部長 皆様、ありがとうございました。

これを持ちまして、令和元年度第1回総合教育会議を終了いたします。

なお、今年度は、第2回目の総合教育会議を、冬頃に開催することを予定しております。詳細が決まりましたら、改めてご案内させていただきますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

本日はどうもありがとうございました。

以 上